

パルシステム東京 震災復興支援基金「パル未来花基金」助成活動レポート

震災復興支援基金「パル未来花基金」の助成を受けて、復興支援活動に取り組みました。その取り組みについて、組合員の皆さんにご報告します。

グループ名	NPO 法人フォトボイス・プロジェクト
支援対象者・エリア	福島市在住の参加者（福島県） 仙台市在住の参加者（宮城県）
企画開催地	東京
企画名称	写真を介した語り合いの場づくりと写真と声の展示
実施期間	2020年4月1日～2021年3月31日

支援活動の目的・内容・感想

（どうしてこの活動をはじめたのか、どのようなことに取り組んだのか、取り組んだ感想など）

目的と内容：東日本大震災後、被災地の多くの女性たちは通常以上にケア役割を担い、また被災の程度や補償などの違いで、本音を語る場や機会が少ない状態でした。そこで、女性たち自身が、被災後の生活や地域の状況を撮影した写真を持ち寄り、写真を通して語り合うグループを被災地の女性グループと協力して2011年6月から開始しました。現在、被災3県と避難した女性たちが住む東京を含む7か所で実施中です。グループでは、社会に伝えたいメッセージ（声）づくりもします。このような写真と声をパネルにして、規模の大小にかかわらず展示も各地で実施しています。展示によってより広く、被災地と被災者の実情を伝えることが出来ます。また展示によって被災した女性たちは、被災経験を社会的なものとしてとらえ直し、風化防止に役立つことを自覚することで自立的な歩みへの一歩となることを目的としました。

実施の状況：しかしコロナ禍が収束せず、グループはオンラインにて実施しました。参加者がパソコンを持っていなかったり、持っていたとしても使用状況により、福島市と仙台市のグループに限定されました。被災地あるいは東京での展示も実施できませんでした。

感想：オンラインによっても写真を見て話し合うグループは実施可能です。オンラインなりの利点もありますが、顔合わせ、発言だけでなく、非言語的表現（身振りや視線、身体の向き一身を乗り出しているのかなど）を、ファシリテーターも参加者同士も見る事が出来ず、感情や考えていることの表出などが重要なグループにとっては、留意する必要があると思いました。

展示はオンライン展示も視野に入れる必要があります。コロナ禍により、予算の組み換えもありましたが、その基金の十分な活用も出来ず、残念でした。

活動の様子（写真など）



巨大堤防は誰のため

県は、住民の意見を聞くことなく、ゼネコンに、閑上（ゆりあげ）漁港の巨大な二重堤防を作らせた。この堤防は、ゼネコンを富ませるいっぽう、日々、波と空を見て漁に出る漁師を海から遠ざけた。これで地域再生と言えるのだろうか。

よしみ
宮城県名取閑上（ゆりあげ）漁港
2019年9月撮影
「声」作成（修正）2021年2月

グループを実施している写真は、参加者の写真と声を画面に上げていく操作もあり、撮れていません。

グループの中での写真と「声」（メッセージ）を創った例を上げます。

撮影者（参加者）は2019年に撮影していますが、グループでこれを公表したのは2020年のグループでした。その時、長い「声」も創りました。しかし、2021年2月のグループで、ファシリテーターや他の参加者と話し合いながら、より端的に自分の言いたいことを焦点化し、左記のように修正しました。